

現代中国語の詞彙変化

大 原 信 一

I

中国語の歴史は、ふつう上古（西暦3世紀以前＝五胡の乱華以前）、中古（4世紀から12世紀＝南宋の前半まで）、近世（13世紀から19世紀＝アヘン戦争まで）、現代（20世紀＝五四運動以後）の四期にわけられる。これら四期にわけられた言語は、それぞれ、音韻・文法・語彙といった言語それ自身の構造の上で特徴をもっている。一般的にいて、言語の時代区分は当然その言語自身の性質によって行われなければならないが、言語の性質はそれを使っている社会の性質によって、なにかの形で規定されることも考えられる。古代とか近世のばあい、背景になっている社会とその時代の言語の性質との内面的なつながりは、今まであまり明らかにされていない。とくに古代語のばあいは難しいが、現代語のばあいには、その内面的なつながりは割合にいえるのではなかろうか。

では、どういう所に現代語の特徴があるのか。これについて、以下の三点をあげることができる。

第一に、言語自身の構造の問題として、(1)西洋語法の適切な吸収、(2)複音節語の大量の増加という二点が従来からあげられている。¹⁾

新しい時代の新しい内容を盛るにふさわしい口語文をもとめる「五四」時代の情況について、私はさきにのべたことがあるので、今はこれにふれない。²⁾ その結果として、口語に基礎をおく国民的文章語が生まれ、共通語

1) 王力：漢語史稿 上冊 p. 35

2) 魯迅と白話文運動（人文学 第38号，1958年）

の発展に大きな影響を与えるとともに、今日まで半世紀ほどの間に、語構成法・統辞法の上で著しい変化発展をとげている。ただ、この変化は西洋語法の影響ということだけでは処理しきれないほど、大きなひろがりを持ち、中国語法の内部的発展法則にもとづく変化とみななければならない。

次に、言語それ自身の面から、はっきり前時代と現代とをわけるともう一つの指標は、語彙の世界である。ここに鮮明な断層がみられるのは、「現代」という時代特有の生活を営むために必要な用語が、もはや存在理由を失った前時代の用語と交替したからである。要するに、この「現代」という時代にはいって、中国社会の構造変化の反映として統一的な国民的文章語が必要とされ、文章語は従来の伝統と断固として袂別して重大性をはらんだ転換を遂行した。文法構造の変化や語彙の深刻な改変もまたそうした社会的事象による点が多いといえよう。

第二に、現代中国語のあり方、存在形態の変化という面から、現代語の特徴を規定することができる。方言の分裂をのりこえて、民族全体にわたって単一の共通語が発達してきたことは、この時期の特徴である（この過程——すなわち五四の「白話」から現在の「普通話」へ発展して行く過程は中国語内部の古い要素が消え去り、新しい要素が蓄積される過程である）。むろん、共通的な言語の形成はいつの時代にもある程度みられる（たとえば清時代の「官話」）が、現代の共通語はそれらと比べて、質的にも量的にもずっと高度のものである。

第三に、言語を伝える方法、記録する方法の変化からも、現代語の特徴をうかがうことができる。文字の普及、大量の印刷物の発行、映画・ラジオ放送の発達とは前時代にみられない現象として現代語の特徴形成に加っている。言語の伝達手段の発達によって、単一の共通語が中国全土にわたって同時に聞かれ、または読まれるというような、中国人の言語生活の大きな変化がもたらされたし、また言語の質が著しく高められて、近代的な科学的内容が適確かつ精密に表現されるようになった。伝達手段の発達は

語彙の変遷にも一つの条件となったと考えられる。言葉が大量にはらまかれる時代になったからこそ、新しい単語は迅速に中国語としての市民権を認められるようになったからである。

さきに、私は『現代中国語の語彙と文体の変遷に関する一考察』¹⁾と題して、未熟な文章をかいたことがある。この文章は、1949年中華人民共和国成立後の新しいスタイルの発達と語彙の変貌が、あたかも五四時代の文章語の創造と語彙の画期的変化が清末からはじまる過渡期をもっているように、一つの過渡的な時期を経ているにちがいないというねらいから、1931年以後の解放区の文献を検証したものである。この考えは今も変りはないが、さきの文章は考察の対象が比較的せまい一時期に限定されていたので、こんどは語彙の変遷、とくに、新しい事物や意義分野に新しく出現した概念はどのような方法で命名されたかということを中心として、これを五四以前と五四以後の二つの時期にわけて追究してみたい。

以下、戊戌政変(1898年)から清朝の末年までを第1期、五四運動(1919年)から中華人民共和国の成立(1949年)をへて現在にいたるまでを第2期とする。

II

アヘン戦争後(1842年)、中国はくりかえし外国勢力から屈辱を蒙り、封建制度はしだいに崩壊の一路をたどるが、他方、この19世紀末の数十年間に資本主義の萌芽とみられる要素(軍需工業、航運・鉱山および金属・製紙など各種の小規模の工場)が成長しており、新しい用語への要求がはじまった。とくに、戊戌政変後、異質的な西洋の文化や民主主義理論の輸入にともなって、中国語の語彙は、思想・政治・法律・経済・自然科学などの各分野にわたって、全く質の異った概念をあらわすために、大量の用語を必要とした。これらの新しい用語は、(1)日本で作られた西洋の学術用

1) 人文学 第44号(1959年10月)

語の訳語の輸入、(2)音訳語の吸収、(3)新語の創造によって提供された。

日清戦争(1894~95年)後、近代科学・政治・法律を学ぶため多数の清国留学生が日本へおくられ、西洋の書物が日本語から中国語へ重訳されるとともに、日本人の著作もまた中国語に翻訳され、日本で作られた訳語が大量に中国へ輸出された。¹⁾

中国語の語彙のなかには、一語が一音節しかふくまぬものが少ない。単音節的といわれるのはそのためであろうが、この特徴づけはあまり正しいとはいえない。古代中国語では単音節語がかなり多いが、たとえば論語のなかには 天下 百姓 夫子 大夫 草創 討論 修飾 潤色などの複音節語がみられる。これらは二つの構成要素からなる連語であるが、このような語構成法にもとづいて、日常語のなかに多くの複音節語がうまれている：眉→眉毛，髪→頭髮，舌→舌頭，窗→窗戸。たしかに古典中国語では、一つの文字が一つの観念に相当し、たとえば「法」という字は law, method を意味した。しかし、現代語では多くのばあい。前者は古くから存在する「法律」を利用して表わされ、後者は日本語に由来する「方法」によって表わされている。新しい用語の多くはこの種の複音節によって補充された。

古くから存在する複音節語には限度があるし、民衆語すなわち口語のなかに対当する語が多くはみいだせなかった。幸いなことに、漢字の素養な

1) 中国における西洋の科学技術書の翻訳はすでに明時代(16世紀後期)に始まっている。アヘン戦争後、新文化を吸収するため北京に同文館(1862—1902年)、上海では江南製造局に訳語館(1870—1907年)を設けたのをはじめ、各地で訳語事業が始められた。日本で蕃書調所(1856年)、洋書調所(1862年)が設けられたのとはほぼ同じ時期で、相互に影響しあったものと推定される。たとえば、「權利」という語は荀子・史記・漢書などにみえるが、同文館の『万国公法』(1864年)には right に対する訳語として用いられている。また、日本が幕末以後急速に英語を取り入れようとした頃には、すでに立派な英華辞典が数種類できていた。それらはいずれも日本に大きな影響を与えたが、なかでも Lobscheid の英華辞典(1866—69)の功績は無視できない。ロブシヤイドからの借用は、日本の訳語の成立に重大な意義をもっている。

しに西洋の学問を受け入れることのできなかった日本人は、西洋の学術用語や科学技術用語の翻訳にあたって、古代中国語を利用してこれを再生転用したり、中国語の語構成法・造語法にもとづいて新しい用語を作りだしていた¹⁾。それらの用語は同じ漢字で表記されているという決定的な理由から、中国語のなかに大量に導入された（そのなかには、「場合」、「取消」、「手続」などの純然たる日本製の複音節語をもふくむ）。

もし、当時すでに中国で言文一致が確立していたとしても、それ以外の可能性があったであろうか、民衆語のなかから選んで新しい用語を作りあげるという可能性が期待できたであろうか。そう疑わせるほどこの方法は便利であり、自然であった。日本でいわゆる「漢語」（字音語）が外来語と意識されないのと同様に、中国起源のものと、日本製の複音節語との区別を簡単に指摘することはできない。このようなわけで、日本製の訳語はほとんど「外国語意識」を伴うことなく、大量に中国語の語彙に組入れられ、社会的承認をえた（この方式に準ずる新語は五四以後も増加し、しだいに日本語の仲介なしに自由に創造される）。

日本から中国へ伝えられ訳語は、次のように二種類ある。(a)古代中国語にあった語を利用し、これに新しい意味を与えたもの。(b)二つの漢字を利用して二音節語を構成し、これらの二音節語は中国語の原意からその意味が通じるもの。

(a) 文化（説苑、文徳で教化すること） 文明（易経、文徳かがやくこと） 機械（莊子、巧妙なしかけの器具） 機会（ちょうどよい時） 専制（淮南子、独断で行う） 社会（東京夢華録、土地の神の祭りの日に催した同部落の住民の会合） 労働（白居易、苦勞をかける） 表象（後漢書、表にあらわれた形） 索

1) たとえば井上哲次郎は佩文韻府、淵鑑類函、五車韻瑞その他の儒仏の書をひろく参考して、絶対（法華玄義）、相對（同）、演繹法（中庸序）、倫理学（礼記集記）、形而上学（易経）などの訳語を決定した（改正哲学字彙、明治17年）。易経や朱子語類に精通していた彼にとっては、それらは精神的生活語であつたろうし、また彼が予想していた読者も共通基盤として彼と同じ教養と精神生活をもつ人々であつたと思われる。

引（易林．さがしだす） 組織（糸を組みハタを織る） 憲法（国語．国の大法）
 演繹（朱熹．中庸章句序．意味をおしひろめて詳しく説明する） 分配（後漢書．
 わけ与える） 生産（史記．生活のための仕事） 侵略（史記．田地をおかしと
 る） 世紀（太平御覧．血統の記録） 遺伝（史記．先代から伝えられる） 人
 道（通俗語．夫婦の間のいとなみ） 雑誌（読書ノート，たとえば王念孫「読書
 雑誌」）。

(b) 哲学 主観 客観 物質 抽象 経験 資本 市場 金融 企業 政党
 談判 議会 議員 自治 義務 代理 債務 債権 工業 性能 建築 作物
 信号 汽船 電報 科学 系統 原理 原則 有機 無機 分子 原子 出版
 資料 宗教 美術 民族 集団 改良 批評 否認 迫害 直接 間接 必要

外来語とは、一般に、他の言語体系の資材を自国語の体系に借り入れて、その使用が社会的に承認されたものをいう。日本語から中国語のなかに大量に吸収された一連の訳語は、中国では借用語として意識されていない。それは、前述したように、日本で「漢語」として一括される一類の単語が、古代中国語からの借用か、またはその造語成分を用いて日本で作ったものであるが、外来語とは意識されないのと同じである。したがって、ここで外来語とは、外国語や外国文字で記した語の音を中国文字で転写した音訳語をさすことにする。

音訳語は戊戌政変後からしだいに増加するが、この時期の音訳語の源泉は主としてヨーロッパ各国語であり、固有名詞が最も多く、度量衡・貨幣・薬品・特産物・科学専門語ならびに意識しにくい新事物の名称があらわれている。一般的に、この時期の翻訳者は音訳語の採用にきわめて慎重であって、できるだけ意識語の採用や日本語からの借用にたよろうとした態度がうかがわれる。

音訳語には大別して次の三種類がある。a) 純粹の音訳、b) 音訳と意識をかねたもの、c) 半音半意識。

純粹の音訳といっても、Rome が羅馬 *luo ma* となるように、音訳された外来語の原語音と中国語音との間に対応関係はみられるが、音韻的に等

置されているのではなく、音韻上のズレを伴っている。それは、外国語音と中国語音との間には、同じ音韻組織をもたないため、生じたズレであろう。なお、それ以外に、まず最初に方言（広東・上海）によって原語を音訳したため、方言的色彩をおびた音訳法が共通語のなかへもちこまれたこと、また、原語の発音のとらえかたがまちまちであったこと、表記のしかたが一定していなかったことなどにもよろう。

音訳に意識を加えて意味論上の考慮をはらった外来語もみられる。Utopia にたいする烏托邦 wutuobang は原語の発音からかなりはなれているが、音韻的にまったく無関係ではないし、それが政治制度に関するものであることをほのめかしている。原語にたいして烏托邦という音訳語が社会的承認をえたのは、まさしくそのためである。音韻上の対応関係がそれほど厳密に要求されていないことにも関係があらう。

音訳された外来語に、その語のもつ実体の属性を考慮して、語尾（または語頭）に造語成分を加えて、複合語としたものがある。「泰蒙時」で Times を音訳したのち、新聞であることを示す「報」を加える。「冰」で ice を意識し、cream は「激凌」jiling で音訳する。

a) 柏拉図 (Plato) 達爾文 (Darwin) 紐約 (New York) 加拿大 (Canada) 加倫 (gallon) 仏郎 (franc) 尼古丁 (nicotine) 白蘭地 (brandy) 可可 (cocoa) 甲必丹 (captain) 沙發 (sofa) 撲克 (poker)

b) 烏托邦 (utopia) 邏輯 (logic) 綑帶 (bandage) 引擎 (engine) 來復 (rifle)

c) 泰蒙時報 (Times) 珂羅版 (collo type) 愛克司光 (X rays) 摩托車 (motor cor) 冰其冷 (ice cream) 東亞 (East Asia) 北美 (North America)

この時期に中国で作られた新語には、次の二種類がある。a) 昔からある語に新しい意味を付与したもの、b) 新しく創造されたもの。

前者は、嚴復や他の国粹派の常用した方法であるが、古典により所を求める彼らの方法には、決定的な欠点があった。新しい事物の命名にあたっ

て、そのより所をすべて古典に仰ぐということは不可能だからである。また、彼らの考案した新語のあるものは、正確に新しい概念を表現することに成功せず、「玄学」は「哲学」に、「格致」は「物理」にとってかわられた。後者は日本製の訳語とたがいに影響しあった。

- a) 玄学（北史・老荘の学説をさす→哲学の意） 總統（漢書・総攬する）
 律師（唐六典・僧侶の階級→弁護士のこと） 格致（大学・事物の理を究める
 →物理） 肥皂（さいかち→石鹼）
 b) 公司 洋行 民約 法院 工廠 紡紗 機器 郵政 郵票 鐵路 鐵道
 汽車（自動車） 叢書 月報 探險 接吻

この時期は中国語の語彙の激変期である。怒濤のようにおしよせた西洋の資本主義文化は、中国人にとってすべてが新奇にみえた。外来の新しい事物にたいして、中国の学者は命名に苦心した。しかし、彼らの西洋の新文化・新事物や外国語にたいする理解の程度はまちまちであったし、翻訳にたいする態度はそれぞれちがっていたから、新しい事物の命名は容易に一致安定しなかった。一方、語彙それ自身も急激な変化をおこしつつあった。元来は自由に組み合わせられた連語が一語に凝結しようとしており、また多くの語の意味が人々の新しい思想や認識の影響をうけて、深化・変化あるいは根本的に改新されつつあった。当時の社会は新旧の事物や思想の交雑期であったから、それが語彙の上に反して、一方では大量の新語がうまれるかと思えば、一方ではそれに対応する旧語が依然として通用していた。当時の語彙中の混乱現象は、次の諸点にあらわれていた。

第一は、日本製の訳語と中国製の新語の並存である。「資本」にたいして「母財」が、「化学」にたいして「質学」が、「論理学」にたいして「名学」が、「人力車」にたいして「東洋車」が並用されていた。また、中国製の訳語自身にも不統一がみられる。railway は鉄路とも、鉄道とも訳された。economics を嚴復は計学と訳し、梁啓超は平准学あるいは生計学と訳したが、なおこれを資生学、理财学、財学などと訳す人もいた。

第二は、音訳語と意識語の並存である。外国語から言語資料を吸収するばかり、音訳と意識とがある。意識しにくいものは、まず音訳してから、訳語を創造するのがふつうである。このため、次のように二種類（またはそれ以上）の用語の並行現象があらわれた。

版克 (bank): 銀行 巴力門 (parliament): 国会 代納密斯 (dinamics):
力学 德律風 (telephone): 電話 塞門脱 (cement): 水泥

第三は音訳語の表記の不統一である。さきにのべたような理由のほかに、原語がどの国語である一致しないため、また原語から直接に音訳するか、他国語から重訳するかのちがいのため、不統一があらわれた。

Hegel 黑格兒, 黑智兒 Thames 太晤士, 泰姆士 brandy 白蘭地,
勃蘭地 Latin 拉丁(中), 羅甸(日) gas 加斯(中), 瓦斯(日)

第四は語形の不安定な現象である。複音節の傾向はこの時期に大に進んでいたが、若干の語は、単音節か二音節か三音節か。まだ十分に定型化していなかった。

団: 団体 種: 人種 理: 原理 印機: 印刷機 輪船: 火輪船

第五は、単語内部の順序の不安定な現象である。当時、一語に凝結しつつあった一連の語の構成要素は、その順序が固定していなかった。その原因は、当時の文章は文言で書かれ、それらの語の組合せは、古代語におけると同様に自由だと考えられたこと、また順序のちがう日本語（たとえば和平: 平和）が乱用されたためである。

人民: 民人 物品: 品物 戦争: 争戦 声音: 音声 紹介: 紹介
限制: 制限

清末の造語の特色は、できるだけ音訳をおさえて意識法によったことと、日本語からの大量の吸収という二点にある。なぜ日本製の用語は大きな行動半径を示しえたのであろうか。その理由として考えられるのは、中国の啓蒙家（たとえば嚴復）の作った訳語は文雅であらうして、新鮮な大衆性

と科学性をかいていたこと、明治維新が中国に与えた影響、日本で編まれ西洋語辞典の影響である。とはいえ、このような情況のもとで、中国語に吸収された用語のほとんどは、中国語の語結合の方式と一致している。

主述関係：	文明	自由	事変	
並立関係：	精神	思想	作用	運動
修飾関係：	古典	農民	独占	
動賓関係：	衛生	宣戦	動員	理事

これらの語は、五四以後にも生産されたおびただしい日中共通の同族語とともに、日本産か中国産か、その帰属をきめることはむづかしい。国際的語彙の吸収と考えるのが妥当ではなからうか。

いずれにしても、すでに複音節化への道を歩んでいた中国語は、すくなくとも結果的には、自己の主体性を損うことなく、語彙をゆたかにするため最初の局面をきりひらいた。私はここに、仏典の漢訳をなしとげた過去の言語的経験が現代に投影されているとの感を深くするのである。

III

1919年の五四運動から現在にいたる半世紀たらずの間に、中国の社会はまことに目をみはるばかりの速度で発展をとげ、社会制度・経済・文化のあらゆる面で根本的な変革がおこった。社会の変革と発展にともなう新しい事物の出現は当然また語彙の世界にはげしい変動をひきおこさずにはおかない。

五四運動後も西洋から真理を学ぼうという願望は社会に普遍的にみられた。西洋の資本主義国家から政治・経済・科学・文芸の著作が少からず翻訳され、日英仏独語から政治・経済・文化および日常生活にかんする語が、中国語の語彙のなかにあらわれた。晩清時代の日本語にかわって、この時期のはじめには、外来的要素の主な源泉は英語になった。日本語について、中国語に大きな影響を及ぼした第二の異質的要素は西洋の言語、とくにそ

の代表としての英語であった。英語の表現から中国語の語彙は多くのものを吸収した。英語は、語彙の面ばかりでなく、五四の文章がそれ以前の旧白話文とちがって、いわば西欧的な思考の絲ぐりにたえうような緻密な表現を獲得するために、西歐文体の代表として影響を与えているが、これについてのべるためには、やや複雑な手続きを必要とするので、ここではその余裕がない。

とはいえ、日本語からの吸収は、マルクス主義がようやく紹介されはじめた中国にとって、依然として語彙をゆたかにする重要な方法の一つであった。マルクス・レーニン主義の著作は多くは最初まず日本文から翻訳・紹介され、それを通じて、左翼 右翼 立場 観点 現実 進展 促進などの語がとりいれられた。1922年に成立した「中華労働組合書記部」という名称はその一つのシンボルであろう。

マルクス・レーニン主義にかんする著作とソ連の紹介は、やがて瞿秋白らによって、直接ロシア語から行われることになり、中国製の新語はしだいに日本製の用語より増加し、解放後、日本語からの吸収はほとんどなくなったとみてよい。

1927年に革命根拠地がうちたてられてからは、政治・経済的な理由から外来要素の吸収は二分することになった。国民政府統治区では英語から多くの語が吸収された。音訳も、原語が英語でないばあいも、英語を通じて行われた：

香檳 champang 拷貝 copy 吉普 jeep 尼龍 nylon 維他命 vitamin 華爾滋 waltz 法西斯 fascis 盤尼西林 penicillin

この頃、社会の「上層」では日常生活にこのんで英語を使った（密斯特 Mr. 密斯 Miss 斯狄克 stick 姑德拜 good-bye）といわれるが、このような風潮は1949年以後は中国大陆から姿を消した。

革命根拠地の建設にともなって、ソ連の革命体験を紹介するため、直接または間接にロシア語から一連の語が吸収されたことはいうまでもない。

各地の根拠地が発展するなかで、解放区の政府が生まれ、革命勢力が中国の一部を正式に統治する努力がはじまった。解放区の建設が進むなかで、新しい事物が生まれ、また今日の文章にみられるような常用語句の若干がこの頃から使われだした。

赤衛軍 赤少（赤衛少年）隊 少先（少年先鋒）隊 労働互助社 雇農工会
貧民団 耕牛站 紅色戦士

総結 自願 力量（しばしば人員を意味する：動員所有的力量） 労働力
（物を生産する肉体的能力の保持者、一人まえの能力をものもの） 深入
（～宣伝鼓勵） 勝利（～完成……） 進行（～重新分配土地の闘争） 有
（～組織的調剤労働力）

1935年以降、陝北の新しい解放区でもこの方向への発展はいっそう進め⁴⁾られている。

1949年、中華人民共和国の成立後、政治経済・文化・科学・技術などの各方面にわたる改革と建設が進められるのにもない、語彙の世界にも大きな変貌があらわれた。ソ連の物質面および技術面の援助と中ソ両国の文化交流により、ロシア語が外来要素を吸収する主要な源泉となった。生産・技術・文化ならびに新しい科学の成果に関する国際的な一連の用語がロシア語から導入された。外来語は、固有名詞のほかは、中国人の言語習慣と中国語の語構成の法則にもとづいて、ほとんどが意識されたが、または当初は音訳されてもやがて意識された。

工作量 生産指標 生産定額 専業 教研室 文化宮 導彈 集体 農莊
条件反対 信号体系 卡秋莎（→火箭炮、ロケット砲） 布拉吉（→连衣裙ワンピース）

はげしい社会変革をともなった五四運動からのちの約40年間は、中国人の言語生活史上でかつてない爆発的成長の時期でもあった。大量の新語が創造された。革命闘争の進展と人民文芸の創作にともない人民の生きた言

4) 大原信一：現代中国語の語彙と文体の変遷に関する一考察（同志社大学 人文学 第44号 1959年10月）

葉である方言が共通語や文芸作品のなかに意識的にもちこまれた。文芸のなかの古い要素が新しい精神を表わすためにほりおこされた（自力更生、錦上添花、愚公移山、星々之火可以燎原）。

造語という点からいつばん問題になるのは、大量の新語がどんな材料によって、どんな方法で生産されるかということであろう。中国語の新語創造でもっとも重要なのは、文法的手段による語の構成である。生産的なもの（修飾構造、並列構造）はますます生産的となった（中医、油料、遠景、教条、小型、車間、潜力、項目、環節、争取、審査、安裝、節約、鎮圧）。あまり生産的でなかったもの（主述構造）もその生産力をたかめた（民主、自願、自動、自滿、国营、国立）。

補充構造（解散、圧縮、拡張）は清末の頃に、中国あるいは日本において、訳語の中で創造されたものであるが、この方法による造語は五四以後には、きわめて生産的なタイプとなった（爆破、推進、引動、流失、削弱、加強、加深）。修飾語＋動詞構造は、古代中国語および旧白話にはきわめて少数しか存在しなかったが、五四以後にはやはり生産的なタイプとなった（日産、春灌、冬修、前進、拡張、深耕、詳控、猛進、輪休）。

動賓構造（動員、提議、主席）は以前からも生産的であったが、文体の改変とともに激増した。単音節動詞と単音節名詞から構成される連語（愛国、帶頭、鼓掌、建議、脱産）が一語に凝縮しはじめたこと、二音節動詞と二音節名詞からなる連語が一語に縮約される（抵抗日本→抗日、製造肥料→造肥）ようになったためである。

西洋語の影響をうけて、原語の接辞に対応する造語成分が接辞化の傾向をしだいにもつようになった。

～手（突撃手、紅旗手、多面手）　～者（工作者、無産者）　～員（社員、隊員、學員、訳員）　～性（原則性、階級性、思想性）　～化（工業化、現代化、具体化）　非～（非重点、非正式）　反～（反帝、反共、反民主）

二音節語は単独でも非常に使用度が高いが、それが語として通用すると次の段階では造語要素となって、新語（第二次的表現単位）を生み出すことのできる、豊富な造語資源となった。

高産量 土地改革 階級闘争 物資条件 歴史唯物論 無政府状態

さらにこれらの連語にもとづいて第三次的・第四次的に新語を派生させることもできる。「全国婦女社会主義積極分子代表大会」というように自由にふくらますことができる。この自由さは、中国語の造語法の特色の一つであるが、この種の造語が大量に生産されるのは、社会の進展にともなう事物の複雑化、概念の精密化と単語の多音節化ということに帰因するものと思われる。

中国語の単語は、一方では複音節化、多音節化の道を歩んでいるが、一方では表現の明快さをもとめて、複雑な構造を簡単なものへ縮約しようとする傾向を示している。「飛行機」は「飛機」と縮約されるが、とくに顕著なのは連語の縮約である。

整頓作風→整風 掃除文盲→掃盲 工業農業→工農業 文化教育→文教
節約用電→節電 安全理事会→安理会 農業生産合作性→農業社

中国語が旺盛な造語能力を発揮できたのは、漢字は一字のうちに概念を総合的に表わしうするという性質をもっているから、単に二つの文字を直接的に結合するだけで、両者はたがいにその意義の方向を限定しあって、一つの論理的なまとまりをもつ意義をしめすことができるからである。しかし、以上にながめてきた恵まれた造語能力・新語構成力は語彙変化の一面にすぎない。五四以後の語彙変化のもう一つの面は、語の意義の変化という点であろう。既存の語の意味内容の転化あるいは精密化によって、社会の発展の中で出現した新しい事物を表現する方法であって、これは全体としての中国語の表現の分析化という歴史的な事実を思いあわせれば、いっそう理解しやすいであろう。

第一は語の多義的な使用。その一つは、新しい社会の必要に既応する転義的な用法である。たとえば節目は、文章の章節項目を意味したが、演芸・放送などのプログラムの一項目を意味する。検討は自己の誤った思想や行為の点検批判を意味する。その二は比喩的用法で、たとえば高潮→社会主義高潮、包袱（ふろしき）は思想包袱のように落後した思想の意味に使われる。

第二は同義語の分化。たとえば人口→戸口、前者は概括的なばあい、後者は具体的なばあいに用いられるようになった。基本→基礎、前者は形容詞や副詞としてのみ用いられるようになった。

五四以後にみられる新しい語法・豊富な語彙、きめの細い精密な文章表現は、40年の歳月をかけた人民の取捨選択の結果と考えてよいと思う。このなかで、清末にみられた語彙の混乱現象はほぼ安定してきた。

第一に、日本製の用語と中国製の用語との並存は、あるものは前者を、あるものは後者を採用することによって混乱はしだいに消滅しつつある。日本製訳語の乱用は五四以後に正され、字義からみて理解しがたいものは、中国製の用語がこれにかわった。

第二に、音訳語と意識語の並存現象も、固有名詞以外は、音訳語が消えて意識語がこれに代るのが一般的な傾向である。德律風は電話に、德謨克拉西は民主に、習明納爾（ゼミナール）は課堂討論に、康拜因（コンバイン）は連合收割機におちついた。しかし邏輯はのこって、名学・論理学が淘汰された。意識語では logic の意味が表せないからであろう。

第三に、数種類の音訳語は統一された。チョコレートを表わす巧克力・巧格力。查古律などは巧克力に統一され、シベリアを表わす西伯利亚・西比利亚は前者に統一された。

第四に、順序の固定しないものは、多くは五四以後に一つの語形に統一された。しかし、和平と平和についていえば、戦争の反義語としては和平

が使われ、人の性質に関しては平和が使われているように、語言と言語、到達と達到、考查と査考などはそれぞれ意味にちがいがあ

以上にながめたような現代中国語の語彙の大きな変化と成長は、その社会の言語的環境の変化ときりはなしては考えられない。言語ほど文化の総体と結びついているものは稀であり、とくに語彙の発達

は文化のあらゆる領域の活動のたかまりを反映する。語彙体系のみが文化とはなれてひとりでに豊かになることもなければ、語彙体系がま

ずしいままで文化のめざましい高まりもありえない。その国の言語と、その言語の上にくみたてられる言語文化の発達は、たがいにわかちがたく結びついている。

現代中国語の語彙は、1919年からはじまった爆発的な成長期をひとまず経過した段階にある。吸収すべき国際的語彙の吸収はひとまず終わったが、今後も新しい事物や概念のために補給も行われよう。この国の建設が一日と向上していくなかで、現行の一語一語に意味のとりきめをやりなおす必要もおきてくるであろう。中国における言語生活の新しい領域のひろがり

はより精緻な概念の定着を徐々になしとげつつある。

(1965, 4, 5)

参 考 文 献

- さねとう・けいしゅう 中国人日本留学史 (第7章日本語彙の中国語文へのとけこみ) 1960年 くろしお出版
- 高名凱・劉正琰 現代漢語外来詞研究 1958年 文字改革出版社
- 北京師範学院中文系漢語教研組 五四以来漢語書面語言的變遷和發展 1959年 商務印書館
- 王立達 現代漢語中從日語借來的詞彙 (中国語文 1958年2月号)
- 鄭 龔 談現代漢語中的“日語詞彙” (中国語文 1958年2月号)
- 伍 民 五四以来漢語詞彙的一些變化 (中国語文 1959年4月号)